

多文化教育を考える視座②

長澤 貴

The perspectives for multicultural education

Takashi NAGASAWA

The purpose on this article is to reveal the frames which are “rhetorical frame” and “activity frame” of practitioners who are engaged in the project about multicultural nursery. The project consists of nursery teachers in Mie prefecture. I also am engaged in the project as a coordinator. Any transformations of two frames and any relation between two frames are revealed on this article.

はじめに

前稿、「多文化教育を考える視座：同化と排除を超えて」（長澤，2012）では、多文化教育が、マイノリティーのマジョリティーへの同化と化す傾向とその危険性について指摘した。そして、そこでは言語の教育の在り方が大きく関わっているであろうことも指摘した。また、同化と排除の政治学に抗しつつ多文化教育がいかにして展開できるのかという点、そして、その際に言語の教育をいかに展開していけばよいのかを課題として残した。

本稿では、いかにして多文化教育の実践を展開できるのかという前稿で残された課題をを探究する。そのために本稿では、実践者の「修辞学的枠組み(rhetorical frame)」と「活動の枠組み(activity frame)」という実践を行う際の「枠組み」(Schon,1983)に注目する。「修辞学的枠組み」とは、佐藤(1996)によれば、「実践において直面した問題を設定し議論するディスコース（語り方と論じ方）の『枠組み』」(p.77)である。そして、同様に「活動の枠組み」とは、「その問題の解決を求めて遂行される実践を、基礎づけ統制する行為（活動）の『枠組み』である」(p.77)とされる。すなわちここでは、多文化教育を語り論じる実践者の枠組みと多文化教育を実践する実践者の活動の枠組みを問おうとする。

この二つの枠組みは、相互に関係し合いながら変容していく。そしてその変容こそが、実践そのものの変容を生む。本稿では、この二つの枠組みが多文化教育に関わる実践者の中でどのように変容していくのかを明らかにすることを目的とする。

1. 研究の対象と方法

1. 1. 研究の対象

本稿では、公益社団法人三重県人権教育研究協議会（2012年より公益社団法人）主催の

就学前プロジェクトにおいて、多文化保育の実践に関わっている保育者たちを研究の対象とした。

筆者は、2010年より三重県人権教育研究協議会の就学前教育プロジェクトにコーディネーターとして関わっている。このプロジェクトでは、同和保育のあり方を探求してきた歴史を活かし、2009年からは多文化保育の課題に取り組んでいる。また、このプロジェクトは、県内の現役の保育士を中心としたプロジェクトである。参加メンバー達は、日頃保育の実践に従事しつつそこで感じた課題と、プロジェクトを通して学んだこととを絶えず呼応させながら、それぞれの専門職性を高めていっている。

三重県人権教育研究協議会就学前プロジェクトの4年間の取り組みの概略は以下の通りである。2009年は、県内の多文化保育に携わる園等の実地調査を経て、「ことば」、「生活・遊び」、「食事」、「保護者」という4つの観点から多文化保育のための視点を得た。2010年は、三重県内及び関西圏の多文化保育に関わる園等の実地調査を行い、全ての人が安心できる園という場所のあり方、そして外国にルーツを持つ子どもの辛さや、様々な差別等、子どもに関わる人たちが見ようとしなければ見えてこないこともあるという、保育に関わる者の意識の問題に焦点を当てた。さらに、2011年は、関西圏の保育園や多文化共生に関わる機関を訪問、取材した。この中で、園のあり方としての子どもたちにとっての居場所という観点、そして、国籍や文化、ルーツ等、様々な差異をどのように捉えるのかという保育者としての考え方の問題に焦点を当てた。そして、2012年は、昨年度までの取り組みを通して学んだことをもとに、参加メンバーそれぞれの実践を持ち寄り、実践を振り返ることを行った。

このプロジェクトは、一年間の取り組みの成果としてリーフレットを発行している(資料1、資料2、資料3)。このリーフレットは、県内の保育園(保育所)に配布され、園内研修の際の資料等として用いられている。

本稿では、このプロジェクトの取り組みの中で、参加メンバーの保育士たちの「修辞学的な枠組み」と「活動的な枠組み」がどう変化していったのかを明らかにする。しかし、このプロジェクトのメンバーは、数年間継続して関わるメンバーも入れば、一年限りで交代していくメンバーもあり、メンバー個々の「枠組み」の変化というよりは、このプロジェクト自体の「枠組み」の変化が研究の対象となる。

1. 2. 研究の方法

本稿の研究に当たっては、エスノグラフィーもしくはアクションリサーチの研究方法をとる。

本稿の研究対象となるプロジェクトに対して筆者は、上述した通り、コーディネーターとして関わってきた。就学前プロジェクトの多文化共生に関わる取り組みの4年間の取り組みのうち、初年度の2009年は、オブザーバー的な立場での関わりであったが、その後2010年からはコーディネーターとして関わっている。このコーディネーターとしての関わりは、ほぼ月1回、年十数回のプロジェクト会議及び、現地調査等に基本的にすべて参加も含まれる。すなわち、プロジェクトのメンバーたちと、議論や調査を共有する立場にある。

つまり、筆者は、研究対象の内部においての記述を試みるのであり、さらには単に内部にいるだけではなく、そのプロジェクト自体を変えていく立場にある。そこでの対象に対する研究の方法は、内部への参与と観察というエスノグラフィーの手法と、自らの関わりの過程とそのことによるプロジェクトの変化の過程の記述というアクションリサーチの手法となる。

2. プロジェクトの実際

2. 1. 2009年の取り組み

この年度の取り組みで特に意識されていたことは、多文化保育とは外国籍の子どもや、ルーツの異なる子どもに対する子どものためだけのことではないということである。多文化保育とは、全ての子どもたちの「その子らしさ」を育てる保育であるとの前提に立っている。

このような前提に立つことができたのは、もちろん様々な交流を経たからではあるが、それ以外に特筆すべき点がある。外国籍やルーツが異なる子どもがいない園に対していかに発信していくかという点がメンバーに絶えず懸念としてあった。それゆえ、多文化保育を外国籍やルーツの異なる子どもの問題とだけするのではなく、全ての子どもに関わることとするという視点が必要であったように思われる。

このような前提のもと2009年度の取り組みでは、「ことば」、「食事」、「生活・遊び」、「保護者」という4つの観点から、調査を行った園の取り組みの特徴を見いだした。

2. 2. 2010年の取り組み

この年度の取り組みから筆者は、このプロジェクトに対してコーディネーターという立場に関わることとなった。コーディネーターとして最初に行ったことは、参加メンバーの意識の転換であった。リーフレットを現場でより活用できるものという思いもあり、プロジェクトとして探求する問いは、**how to**を問うことが多かった。一な場合は、どうすれば良いか。一な方法はどうか等という実践の方法論に関わる問いである。コーディネーターとしての筆者は、100人の実践者が入れば100通りの方法論があり、普遍的で一般化可能な方法は存在しないとして、問いの変換を促した。

そして、この年度は県内の多文化保育に取り組む保育園（所）および関西圏でルーツが異なる子どもたちに対する保育の実践を行っている園で調査を行った。ここでの調査は、保育の実践に携わる保育士へのインタビューが中心となった。この中で、焦点が当たったのは、保育園という場が外国籍の子どもやルーツを異にする子どもたちにとってどのような場であるのかという点と、そのような子に対し保育士としてどのような視点から支援を行えばよいのかという点であった。外国籍の子どもや保護者にとって、園が子どもたちの健康を守るための砦となっていたり、卒園してからも帰ってきたくなるよう場であるということを知り、外国籍の子どもやルーツを異にする子どもたちにとっての園という場の意味を考え直すきっかけとなった。そして、外国籍やルーツを異にする子どもたちの抱える辛さや様々な差別の現実について、あえて見ようとしなければ見えてこない現実もあることに気づかされ、保育士としての視点の持ち

方についても考え直すきっかけとなった。

2. 3. 2011年の取り組み

2011年度は、関西圏への聞き取り調査が取り組みの中心的な活動となった。関西圏の二つの園と一つの機関への聞き取り調査を行った。

この年度の取り組みは、3年間取り組んで来た多文化共生の取り組みに対して、本来は結論を出す年度であった。しかし、最終的にはこの年度を起承転結の「転」の年度と位置付けた。この調査が、プロジェクトのメンバーにとって「学び直し」の契機となったからである。この年度の取り組みを通じてプロジェクトのメンバーたちが経験した「学び直し」は「本当の支援とは何か」という点に関してである。メンバーたちは、それぞれ自分たちの実践を通して様々な子どもたちの支援を行ってきた。しかし、その支援が果たして誰のためのものであったのか、マジョリティーや大人にとって都合のよい支援であって、マイノリティーや子どもたちが本当に必要とする支援であったのかとの問いをメンバーたちは抱いた。

「本当の支援とは何か」との問いは、プロジェクトのメンバー達に二つの新たな視点をもたらした。「目の前にあるハードル」という視点と「ハウスはあってもホームがない」という視点である。「目の前にあるハードル」という言葉は、聞き取り調査において聞かれた言葉で、人と人が対する時、理解し合うことの難しさと、それゆえの豊かさを表した表現であると思われる。メンバー達にはとてもインパクトのあった言葉のようであった。しかし、この表現の意味することについては、議論が活発に行われた。「ハードル」とは何を意味するのか、そして豊かさとは何かを巡って、メンバー間で意見は割れた。また、「ハウスはあってもホームがない」という視点は、外国籍やルーツを異にする子ども達にとって、保育園が心地の良い居場所となり得ているのかとの問いを生んだ。

2. 4. 2012年の取り組み

2012年の取り組みは、現在（執筆時）継続中の取り組みである。

2012年の取り組みでは、プロジェクトを通して学んできたことを実践に活かすことが目標となった。それぞれの園での事例をもちより、メンバー間でその事例を検討し合うということをして4回行った。事例は、多文化共生に限定はしないものの、「目の前にあるハードル」であったり、「ハウスはあってもホームはない」といった、今までのプロジェクトで学んできた視点が反映されるような実践を選んでくことを求めた。

昨年度の取り組みに引き続き、「目の前にあるハードル」と「居場所」という二つの視点が、実践を持ち寄り、それぞれの実践を振り返るにあたっての視点となった。そして、例えば、良いこと、悪いことという判断基準をもって対応してしまうが、そればかりになると実践者である自分の見方が狭くなり、結果として子どもとの間にハードルが作られてしまうのではないかと、外国籍やルーツを異にする子どもに対してだけでなく、日常的な子どもたちとの関わりを振り返る際の視点となった。

しかし、一年間の取り組みをリーフレットにまとめる段階でメンバーたちは戸惑いを見せた。

リーフレットとして何を伝えたらよいのか分からないという声が多く聞かれた。実践事例を書き、それを交流し合うことで個人としては多くを学んだという。しかし、そのことと、リーフレットとして何かを伝えることとは別物として捉えられていた。

3. 結論

プロジェクトのメンバーの **how to** を問いを排したとき、メンバーたちの問いは、2010年の取り組みに見られた、保育園という場の意味や保育士としての眼差しへ、そして、さらに2011年には、「ハードル」という他者理解の問題、「居場所」という子どもたちのアイデンティティの問題をも含んだ場の意味へと変容していつている。このことは、プロジェクトのメンバーが実践を行う際の「修辞学的枠組み」の変容を意味している。

さらに、この変容は、**how to** を問うことに比べ、理念的な問いになったということもできる。しかし、理念的であるからといってそれが実践へと活かされていないわけではない。2012年の実践事例の検討の取り組みから、「良いこと」、「悪いこと」で判断という「活動の枠組み」がハードルを作っているのではないかと、「活動の枠組み」を見直す枠組みとして「修辞学的枠組み」が働いている。

ところで、2012年の取り組みにおけるリーフレットづくりの際に見せるメンバーたちの戸惑いは何を意味するのであろうか。2010年の取り組み以来毎年、メンバーが変わっても、「ありのまま」という言葉が必ず語られる。「ホーム」や「居場所」とは、その子がその子らしく「ありのまま」でいられる場所を意味する。このように子どもたちに対して「ありのまま」でいてほしいと願うと同時に、保育士としての自分に対しても「ありのまま」でいたいとの願いでもある。2012年の取り組みの中で、園の中で本音で語り合えない同僚性の問題が課題として語られた。

「ありのまま」でいられない保育士としての自分と、異文化の中で「ありのまま」で居にくい子どもたちがどこかでパラレルになっていたのかもしれない。多文化共生について探求していく過程で見出したのは、「ありのまま」で居られない保育士としての自分であり、「ありのまま」でいるための道を今見つけようとしているのかもしれない。

文献

- * 長澤貴,2012,「多文化教育を考える視座：同化と排除を超えて」,鈴鹿短期大学紀要 32,42-50,2012
- * 佐藤学,1996,『教育方法学』,岩波書店
- * Shon,Donald.,1983,“The reflective practitioner”, Basic Books. (佐藤,秋田 訳,『専門家の知恵 反省的实践家は行為しながら考える』,ゆるみ出版,2001)

多文化共生保育交流会を開催しました。

2009年11月13日(金)三重県人権センターにおいて多文化共生保育交流会が開催されました。会場には日々の保育に役立ち参考になるものと考え、各園で使用している翻訳絵本や遊びの資料などを展示したり、日頃の取り組みや保育の様子を掲示したりして、参加者の皆さんに見ていただきました。また、保育現場で役立つ遊びの紹介もあり、参加者全員で歌ったり踊ったりしました。その後は5グループに分かれて、和気あいあいとした雰囲気の中で、交流会が行われました。今回の交流会では、各園での取り組みの意見交換が活発に行われ、保育をうける子どもたちだけでなく、保育士も元気になるヒントがたくさん得られる充実した交流会となりました。

● お寄せいただいた感想より ●

- ・ とても参考になりました。同じ現場で働いているという気持ちからパワーを頂いたし、もっと頑張ろうと勇気を頂きました。
- ・ いろんな所でいるんな取り組みがされているんだと感じました。(日頃は少数派というイメージが強いので) 保育士だけでなく、子どもや保護者もこういう集まれる場があるといいな、と感じました。

今回の交流会が、多文化から、みんなで人権について考え合うひとつのきっかけになればいいなと思います。

講演会レポート

NGO神戸外国人支援ネットワーク 武田真由美さんに

『多文化保育園の取り組み紹介 〜多様性を認め合う保育をめざして〜』と題して、自らが多文化保育園の設立と運営に携わってこられた経験から、保育現場で活かせる活動や教材などを具体的に紹介しつつ講演していただきました。

- ▶ 一人ひとりの子どもの「その子らしさ」を育てる保育
- ▶ 対象は外国籍の子どもだけでなく、すべての子どもたち

多文化保育

多文化保育で大切なことは、すべての子どもたちがその子らしくあり、自分に自信を持てるよう自尊感情を育てる保育、またお互いの違いを認め合い尊重しあう心を育てる保育、それは私たちが日頃から大切にしてきた人権保育につながることだと受けとめました。

また、アンケートで事前にお聞きしていた、多文化保育に関する各園の工夫や悩みなどに対して、武田さんからコメントをいただきました。日頃の悩みを解ききつかなかった、あるいは、新しい気づきがあったという方も多かったようです。

多文化共生保育交流会、アンケートから見えてきたこと

- ・ 職員の意識 …… 保育士をはじめ、職員集団が「いろいろな子どもたちがいて楽しい」と思えること、多様であることが当たり前だという観方になれることが大切。
- ・ 子どもの立場にたって …… 「自分ってこんなところがあるよ」「自分が大好き」と思えるよう、一人ひとりが自信をもって開ける活動が園やクラスの中にあふれていることが大切。違う文化の中でも開けるように工夫することが大事だと思います。
- ・ 仲間づくり …… クラスの中で大事にみたいききたい子を中心に、友だち同士が認め合い、わかり合い、つながっていく仲間をつくっていくことが大切。ひとりが周りの見方や考え方に合わせるのではなく、ひとりの意見を大事にできる仲間になれることが大事だと思います。
- ・ 保護者とのコミュニケーション …… 保護者の願いを切り、互いに話し合い、受け入れ合いながら、進めていくことが大切。言葉が通じなくても、親の思いを知る努力をしていきたいです。

私たちは、取り組みを進める中で、このように少人数であるがゆえに馴染めない現状や周りと違いがあることで交わりにくい状況は「多文化」に限ったことではなく、すべての子どもたち、保育園の課題ではないかという視点にたどりつきました。すべての子どもと保護者が大切にされ、つながることのできる関係づくりのために、このリーフレットを考えるきっかけにしてください。

食事

- ・ 各国の料理を献立に取り入れている
- ・ 料理を通して多文化交流をしている
- ・ 弁当がどんなものかなど、伝えたいことを写真を使って説明している

各園でこんな工夫しているよ！

生活・遊び

- ・ あいさつや物の名前など、母語を遊びの中に取り入れている
- ・ 各国の遊びや歌、玩具を保育に取り入れる
- ・ 各国の歌をみんなであそび楽しむ

保護者

- ・ 母語の冊子を手元に置き、簡単な言葉を使ってコミュニケーションを図る
- ・ 交流会を持ち、保護者同士のつながりを作る

ことば

- ・ 通訳のチームワーク
- ・ おたよりカードをつけている
- ・ 絵や写真で生活しやすいように表示している
- ・ 絵本に訳をつけて置いている

生活・遊び

- ・ 各国の歌をみんなであそび楽しむ

保護者

- ・ 母語の冊子を手元に置き、簡単な言葉を使ってコミュニケーションを図る
- ・ 交流会を持ち、保護者同士のつながりを作る

5
 2
 116

「共に生きる」

誰とでも共に生きるということは至難です。文化や言語などが異なるため、あるいは「障がい」のために、しばらくは一緒にいることができて、小さなトラブルがあると、避けたり、反発したりしてしまうこともあります。そういう日常の中で私たちは生きています。

保育のなかで、そういう事態をなるべく少なく、あっても乗り越えていくために、人権保育の実践が展開されてきました。しかし、研究者などは「多文化」「家族のあり方」などのかを主な専門として、別々に語っていることが多かったと思います。

しかし、実際には、ひとつの園の園の権課題がひとつだと考えるのは、非現実的です。ときには、外国籍の子に障がい診断名がついていて、しかも、ひとり親家庭であることもあります。実践者にとっては総合的に考える方が自然で、その良さや今の取り組みにも現れていると思います。

人権を守るために歩んできた歴史をふまえての知識と経験を、すべての人権課題に取り組みむための基礎として活かす、市町を超えた実践者の支え合いが、これからもっと拡がることを願っています。

戸田 有一(大阪教育大学)

ホーナムゲームの味

今後、社団法人三重県人権教育研究協議会のホームページ内でもプロジェクト会議の様子や内容などを掲載していく予定です。

ぜひ、みなさんも三重県人教のホームページをチェックしてみてください！ よろしくお願ひします。

ホームページアドレス
<http://www2.ocn.ne.jp/~sandokyo/>

三重県人権保育推進支援事業

2010年3月 発行

三重県健康福祉部こども局こども家庭室



多文化共生から人権保育を考える

今回のプロジェクトでは、ことばや文化が違う多国籍の子どもたちと共に生活していく保育について考えてきました。

三重県にも現在、いろいろな国籍の人が住んでいます。戦前から日本に住んでいる人々だけではなく、戦後、そしてごく最近、日本に住む外国人も増えてきました。在日韓朝鮮人の人をはじめ、ここ20年では、南米からの日系の人、フィリピンの人も多く日本で働くようになってきました。

特に、1990年に行われた「出入国管理及び難民認定法」（入管法）の改正、施行がきっかけとなり、日系人労働者が増えました。最近では、看護、介護の需要に伴い、アジア圏の人々もたくさん日本に働いています。

外国人労働者に頼らなければ経済を支えていくことができない日本の現状からすると、今後こうした傾向が続くことでしょう。

さらに日本人との国際結婚の割合は、約20組に1組といわれるほどに増加しているので、国籍を問わず両親あるいはどちらかが日本語を母語としない子どもたちの数も増えています。

こうした背景により、現在は一部の保育所にしかない外国籍児(外国にルーツをもつ子ども)たちもいろいろな保育所に増えることと思います。

そんな中、こばが違う保育所等で生活しなければならぬ子どもたちの中には、その環境に慣れず、不安定になってしまう子どももいます。また、外国籍児の割合が多い園では、日本国籍児との間に見えない壁ができてしまうこともあります。

このリーフレットを通して、多文化共生保育(とばや文化の違いの中で共に生きる保育)の取り組みが見えてきたことをなげかけたいと思います。このなげかけ、皆さんと一緒に考えていけたらと思います。

外国籍の子や保護者が困っていることは…



多文化共生保育所(園)を訪ねる中でみてきたこと



人がひととして できること ～心とこころのつながり～

【健康の砦としての保育所(園)】

外国籍の子どもの家庭において、さまざまな理由により予防接種や健診は受けにくいものであるという声を聞きました。中には、園医が定期的に母子手帳のチェックをしたり、看護師が子どもの健康状態に気を配ったりして、子どもに健康相談に依る保育所(園)もあります。しかし、1日の大半を子どもと接しているのは私たちであり、子どもの通園時に保護者と顔を合わせる機会も多くなります。そこで私たちは、子どもや保護者の表情や様子を通じて、子どもが健康で、子どもの顔色や体調を注意し、食事や睡眠などに気を配り保護者に声をかけています。私たちは、子どもの健康を守る大切な役割を担っているということを、誇りに思い自覚するとともに、子どもや保護者に寄り添っていききたいと思います。

【すべての人が安心できる保育所(園)】

いくつかの保育所(園)を訪ねる中で、通訳が声をかけることで子どもや保護者の表情が変わる姿を見ました。母語でコミュニケーションを取れる相手がいることが大きな安心となっているのです。しかし、通訳がいるという保育所(園)はほんの一部で、何とかして子どもや保護者に寄り添い、理解しようとする保育所(園)がほとんどだと思います。解りやすく話をしたり、表示をつくるなどの工夫をし、いつでも相手の立場になっただけでいいから、この子とつながりたい、この保護者をつながりたいという気持ちでかかわること、この子とつながりたい、この保護者をつながりたいという気持ちでかかわること、この外国籍の子どもに決して行っていない取り組みは、それだけにとても驚き、すべての人が生活しやすい保育所(園)につながります。相手に寄り添いたいという思いでかかわること、心をつなげ、誰もが安心して通うことのできる保育所(園)をめざしたいと思います。

まとめ

今回、いくつかの保育所(園)を訪ねる中で見てきたことがたくさんありました。そして、それは結果として、多文化共生に必要とするすべての保育に共通して見える大切なことではないかと思えます。

私たちが、保育でこだわって考えていくべきことを確認したい、一緒に考えるきっかけに、このリーフレットを活用いただけたらと思います。

見ようとしなないと見えないこと

【たくさん人の目と心で、子どもたちに言葉を】

外国などさまざまなルーツを持つ子どもや保護者の文化を保育に取り入れていくときには、かたち(フード、ファッション、フェスティバル)だけに留まらない本質的な意識の確認、めざす姿の共通の話し合いが必要になってくると思います。

そして、子どもと生活を作りだしていく中で「何がねらいなのか?」「何を育てたいのか?」を職員間で繰り返し話し合い、共通の意識で進めていくことも大切だと思います。

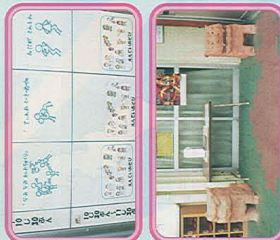
一人一人の子どもの丁寧に見ていくことで、その子への決め付けに気がつかされ、保育を振り返るきっかけになります。そして、知ろうとする思いが保育に携わるすべての仲間に分かることで、子どもたちを肯定的に見ることや、ありのままを受け入れることにつながると思います。保育に携わるすべての人で考えていくことでこそ、子どもの心を育て、保育をよりよいものにしていくのだと思います。

【違いを豊かさと感じ、互いを大切に】

共生の保育では、外国などさまざまなルーツを持つ子どもや保護者が、安心してつながっていくために、周りにいる私たちが自分自身の意識の問題として、考えていくことが必要だと思います。違いを困ったこととして捉え、排除する意識ではなく、違いを豊かさと感じ、互いを大事にして、どう生活をつくりだすかを丁寧に考えていきたいと思えます。

常にアンテナを張り、いろいろな情報をキャッチしていきけるように、自分磨きをしていくことが大切だと思います。

社会福祉法人大阪中こども福祉会 めぐみ保育園



- 子どもが音楽、沖縄のこころや故郷を誇りに思う力を取り入れた。
- 職員が沖縄へ研修に行き、沖縄への理解を深めている。

社会福祉法人聖和福祉協会 大阪聖和保育園



- 各言語が使用される環境(保育者の名前、朝の挨拶、韓国・朝鮮にルーツをもつ保育士等)が整えられている。
- 子どもたちが、自分のルーツに誇りを持ち、互いにつながることを大切にしたり取り組んでいる。

社会福祉法人聖和福祉協会 松阪市立若草保育園



- 通訳がいることで、タカログ語を話す子が、自分の言葉を話しているように感じ、自信や感情の育につながっている。
- 園庭が母子手帳のチェックをしたり、通訳が健診や予防接種の相談にのっている。

社会福祉法人伊賀福祉会 曙保育園



- 保護者同士の自然な交流と協のつながりを重視し(22年度は、外国籍の保護者が保護者会役員として2名選出された)。
- 言葉が通じることによって、その子の存在そのものを認め、受け入れることを大切にしている。

社会福祉法人五垣保育所 鈴鹿市立五垣保育所



- 外国籍の増加を受け、園やかながけ等により、子どもや保護者の関心や理解を深めている。
- 子どもだけでなく、保護者にも外国の文化を伝え、互いの違いを認め合えるようにしている。

多文化共生から 人権保育を考える



ルーツを持つ子どものためにだけではなく、すべての子どもがその子らしさを大切にできる保育なのだという、意識の向上が保育者や保護者に求められています。自分ごととしてとらえ、考えていくことが人権保育をすすめる大きな一歩となりま。これからはみなさんと取り組みや意見の交流をしていきたいと思います。

みなさん からの 声より

前回のリーフレットを読んだみなさんから、意見や感想をいただきました。リーフレットは、多文化共生をはじめ知ってほしい方にも分かりやすく、また話し合いのきっかけに活用していただけたようです。ありがとうございます。

言葉や文化などの違いで取り組みや工夫は多岐に及ぶ。しかし多文化共生保育は、外国などさまざまな

多文化共生による人権の問題が良く分かった。(中略) 同じ目標で進んでいくことが大切だと感じた。

多文化共生による人権の問題が良く分かった。(中略) 同じ目標で進んでいくことが大切だと感じた。

多文化共生による人権の問題が良く分かった。(中略) 同じ目標で進んでいくことが大切だと感じた。

今回のプロジェクトでは、前回は多文化共生から人権保育を考える取り組みとして、ことばや文化が違っても、多文化の子と共生生活している保育所(園)異なる文化間をつなかりに努力している保育所(園)を訪問する。保育士は身振り手振りや、日本語の単語を並べたり、歌をうたったり、スキミングやコミュニケーションをとるようになっています。しかし、細かなことを伝えるには限界があり、時には通訳と共に関係性を深める努力をしながら保育所(園)もあつて。このリーフレットを通して、みなさんと一緒に多文化共生から見えてくる課題を解決する道筋を案

一人として

今年度の取り組みを通して見えてきたことは、外国籍、多文化を生きる子どもの保育の問題は、単にコミュニケーションの問題だけではないということです。共生として重要なのは、国籍、文化、またはルーツが異なる子どもの存在をそのまますべて受け入れることです。日本に暮らす以上、日本での生活に慣れることは必要です。しかし、日本に同化させることも、すべてを許さず、国籍、文化、ルーツ等異なることを認めることと受け入れていくことが、その子のアイデンティティを理解していくことだと思います。

国籍、文化、ルーツ、そして、性別、個性といった側面に気を配ることが、その子のアイデンティティを大切にすることです。そして、このアイデンティティを理解するためにコミュニケーションの大切さがあつて。一人一人のアイデンティティを大切にすることは、決して新しいことでも特別なことでもありません。人権を大切にしようとしてきた経験と知識、そして新しいことでも特別なことでもありません。人権を大切にしようとしてきた経験と知識、そして新しいことでも特別なことでもありません。人権を大切にしようとしてきた経験と知識、そして新しいことでも特別なことでもありません。

ホームページのご案内

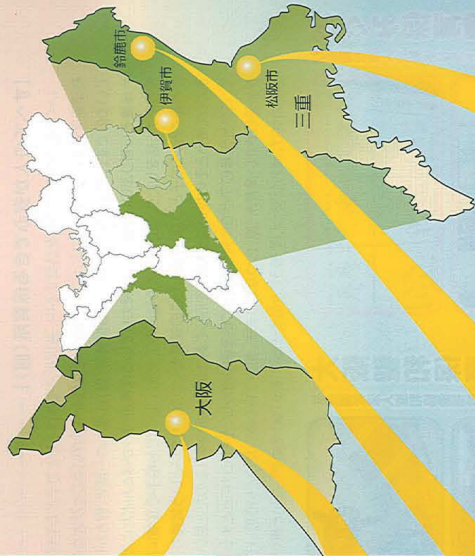
今後、社団法人三重県人権推進協議会のホームページ内でもプロジェクト会議の様子や内容などを、掲載していく予定です。

ぜひ、みなさんも三重県人権推進協議会のホームページをチェックしてみてください！ よろしくお願ひします。

ホームページアドレス
<http://www2.ocn.ne.jp/~sandokyo/>

三重県人権推進支援事業

2011年3月 発行
三重県健康福祉部 ことも局 ことも家庭室



そのほか、取材の中で学んだことを紹介します。

親子で絵本やおもちゃ、ゲームに親しめる部屋がある。貸し出しでその部屋に入らなければ貸し出しできない状態になっている。職員と保護者が話をする機会が増えたり、保護者もゲームのルールが分かるので、自宅でも子どもと一緒に遊べるようになる。

(めぐみ保育園)

幼稚園の保育料は金額であるため、家庭の経済状況によっては保育所(園)から幼稚園に転園することがある。このとき子どもが戸惑わないように保育所(園)と幼稚園の連携、協力は大変。幼稚園でも保育所保育指針を勉強し、教育活動に取り入れている。

(笹川中央幼稚園)

保育所(園)や幼稚園の年長のときは、最年長として扱われているが、小学校1年生になると、年少として扱われる。育ちの連続性を考えたとき、小学校の先生に保育所(園)や幼稚園の保育、教育内容をもっと知ってもらった機会が必要。

(庄野小学校)

家庭の経済状況等によってプラザリノ(学校)から地元小学校に転入してくる子どもは、どうしても学校生活への意識が低い。就学段階で子どもの将来をしっかりと見据えた進路選択への援助が必要。

(笹川西小学校)

アンケートから

2010年度のリーフレットに対して、アンケートを通じて様々な意見をいただきました。皆様のご意見をもとに、より分かりやすく、より活用しやすいリーフレット作りを目指していきます。

会議の中で読み合わせをし、様々な取組をしている園のことを知った。

多文化共生について、自分が知らなかった面を認識することができてよかった。

まためにあったように、全ての保育に共通している大切なことだと感じました。

園全体で協力していく必要があると実感しました。

「学びなおし」

多文化共生保育を初めて3年目になる今年のキーワードは「学びなおし」でした。「学びなおし」は、unlearnの訳語で、「学びほぐし」や「学び捨てる」等と訳されている言葉です。偏見であったり、ステレオタイプであったり、誰もにもある種の誤りや間違いを正す方を持つています。それらは、経験等を通して学んできたものですが、もういちど学びなおすことにより、疑いもまった考え方を「学びほぐし」、「学び捨てる」ことができます。

私たちがこの言葉に出会ったのは、とよなか国際交流協会の園井緑さんと交流の場でした。こ

の言葉に出会ったとき私たちは、様々な現場に赴き、様々な人たちの話を聞いてきた今回の取組自体が「学びなおし」であったと感じました。私たちが「支援だ」と思っていたこと、マイアリティのためにしていると思ってきたことが、本当にマイアリティの人たちのためのものだったのかと、もう一度「学びなおし」、「学びほぐし」経験となりました。

長 瀬 貴 (鈴鹿海翔大学)

このリーフレットのバックナンバーは、三重県人権教育研究協議会のホームページからダウンロードできます。

<http://www2.ocn.ne.jp/~sandyokyo/>

- ▶ 2006年度 / 「部分・継続」を人権教育の視点で考える(中間報告)
- ▶ 2007年度 / 「部分・継続」を人権教育の視点で考える(最終報告)
- ▶ 2008年度 / 「しめ対応」の構構つにあるものは?
- ▶ 2009年度 / 「多文化共生から人権保育を考える①」
- ▶ 2010年度 / 「多文化共生から人権保育を考える②」

三重県人権保育推進支援事業

2012年3月 発行

三重県健康福祉部
こども局 ことま家庭室

100
人権教育推進事業

人権教育推進事業

三重県人権保育推進支援事業

多文化共生から人権保育を考える

私たちは、このプロジェクトでいろいろな施設を訪問して多文化共生の現場で話を聞きました。それが、今まで自分たちが考えていた支援は誰のための支援なのか? 先の見通しをどのように持って支援してきたのか? ということを立ち止まって考える機会にしようと思います。そして、「支援をする」という言葉の中に、支援者中心の発想があったということに気づきました。また多文化共生はコミュニケーションだけの問題ではないことに気づきました。このリーフレットを通じて「共に生きるため」「つながって生きるため」の本来の支援について、一緒にもう一度考えていけたらと思います。

多文化共生のなかで置き去りにされた文化はなかったのか?

(在日、沖縄、アイヌ問題など)
多文化共生の取組からはずされていると感じている人たちがいます。あえて本名を日本名に変え、自分のルーツを隠して生活する人がいます。本名を名乗っていたのに、子どもが日本名を聞いたと言いはじめたのはなぜでしょうか?

日本にきたから日本にあわせるのがあたりまえなの?

「外国人が日本に金目当てで働いて来ているのだ」「日本にあわせるのが当然だ」といった考えの人もいます。
日本にきたから日本にあわせるのがいいよ、ね!」その方がせよなんだよ!」という自分たちの見方を押しつけていることもあるようです。そのような問題をどう考えたいのでしょうか?

共生ってなに?

ある保育所(園)では、宗教(イスラム教)上の理由で食事の除去や、行事への参加も保護者と話し合い決めているそうです。
私たちは様々な文化的な違いをどうとらえているのでしょうか?



一人ひとり困り感や感じ方がつよ同じ支援でいいのかな?

見た目でわかりにくいアジア系や在日の人は、ルーツを隠して生活することが多いことも現状です。一方、外見でわかりやすい外国にルーツを持つ人は「ちがう」と排他され孤立する人もいます。同じ支援でいいのでしょうか?



- 四日市市立南中央幼稚園
- 四日市市立西川西小学校
- 鈴鹿市立庄野小学校
- 社会福祉法人 大坂聖和保育園
- 社会福祉法人 大坂千利社教社 めぐみ保育園
- 社会福祉法人 白蓮福祉会 津愛児園
- 財団法人 とよなか国際交流協会

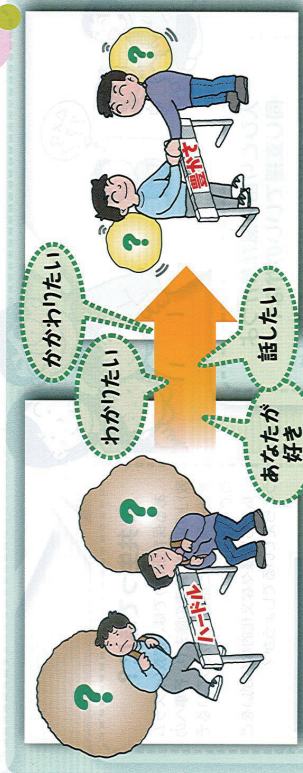
本年度学習や取材で協力いただいた園・所・学校・団体

目の前のハードル

自分とは違った国、違った文化の中で生まれ育った人と接するとき、あなたはどつしますか？

なんとかが相手の事が知りたい、わがたい、力になりたい...などの思いから自分の知識や経験を駆使しながらかわかっていきますか？でもそこに偏った見方や、差別はありますか？そのかわりの中で、行き詰まりを感じたことはありませんか？

大阪の生野にある聖和保育園に伺った時、在日コリアンの保育士と日本人の保育士とが一緒に保育をしていく中で、いろいろある思いがぶつかり合い、そのたびに話し合っているのを聞きました。民族の違い、置かれている立場の違いからいろいろな疑問が生じてくるそうです。様々な葛藤の中、相手との間にハードルがあるように感じるということでした。ついつい自分中心に考えてしまいがちですが、そのハードルは自分の前だけでなく相手の前にもあるんだという事に気づかされました。ハードルっていったい何なのだろうか？



お互い考え、感じ、文化、言葉、ルール、育った環境などが違いますが、その中で、相手と「つながりたい」と思ったとき、どんな事をしようかとそう思う事で、相手とどんなにかかわろうとし、その中で自分が持っていた差別心、偏見などを徐々に無くしていく必要があるのではないのでしょうか。

相手とつながりたいと思っても、どうすればいいのかわからない、答えを見つけない事は簡単ではないかもしれませんが、すぐに「どうしたらいい」というビッタリな答えが見つからなくても、答えを探しながら一緒に歩んでいくことが大事だと思います。

「ハラスメントはあってもホームがない」

空間としての場はあっても、「ここにいていいんだ」と思える場、自分を出せる場にはなっていない。

どういふこと？

日本語を話しているけれど...
抽象的言語、
学習言語の習得が困難



見ても言葉も、
日本人とかわらないよ

例えば...「まる」はわかるが「円」はわからない
「右と左の意で関係するものを線で結びなさい」
「線が結び」って??
学習面でのつまづき
→わかつたふりをして過ごすことを身につけていく

韓流ブームだけで在日は置き去り
本名を名乗りたいけど名乗りにくい社会
例えば...「在日だということを打ち明けたら『そんなの関係ないよ』と返された
→ジャットアウトと感じた それ以上話さない

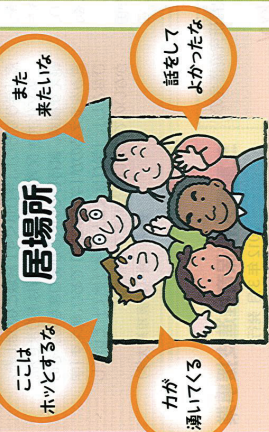
本当に
事いいたいことが
言えていない
子・大人が
周りにいるが
しれません

● 疎外感 ● 自己肯定感かてもない ● 誇りをもって生きられない

ここに挙げたのはほんの一例です。
日本語が話しているから、友だちがいるからと、表面的なところだけを見ていただけではわからない、しんどい状況、生きにくい状況の現実を、私たちは今回の取組で知りました。未だに日本のあちこちで言われている「いやなら帰れ」の言葉、私たちが、マイノリティの人たちが「ここにいる」ことさまたまな思いを、心から受け止めようとしているのではありませんか。
本当の居場所づくりができていくのでしようか。

本当の居場所づくりとは？

- わかってくれる人、心配してくれる人がいる
- 自分は受け入れられていると感じる
- 安心して自分を表せる
- 自分が必要とされていると感じる



これらは、すべての人にとって大切なことです

保育所(園)にできること

- 名前の大切さを伝えよう
- "自分は必要とされている"と感じられる場面、贈り物をしなさい
- 友だちがいるから楽しい、いろいろなことが乗り越えられる、人となつて強くなつていけることを伝えていこう
- "ここにはこの子がいるよ"と、地域で子どもの存在を知って受け入れ、気にかけてあげよう

他にできることは.....??

学校を卒業し、社会でつまづくことがあると、保育所(園)に戻ってくるという事例がありました。保育所(園)が、マイノリティの人の、安心でき、頼れる場所となっている現実もあることを誇りに感じ、保育所(園)だからできることを、今後も探していきたいです。